

東海地方の若者方言 1～アクセントと語彙

The dialects used by the young generation in the Tokai Region 1

- Accents and Vocabulary -

山田敏弘¹

YAMADA Toshihiro

[キーワード Keyword]	東海地方方言、若者世代、アクセント、語彙 Tokai dialects, young generation, accents, vocabulary
[所 属 Institution]	¹ 岐阜大学教育学部 (Faculty of Education, Gifu University)

[要 旨 Abstract] 本考察では、アクセントと語彙に着目して、東海地方の若者世代の方言に関する調査・報告をした上で考察を行なう。

アクセントについては、地名の「名古屋」と「金山」について、学生世代でも見られるバリエーションがある。この点を地理的分布と交通手段から考察した。語彙に関しては、コンビニエンスストアの略称、愛知県の学校用語、形容詞型活用をする色彩名詞、及び、オノマトペに関して調査した。そのうち、コンビニエンスストアの略称については、出店時期・出店数との関係を考察し、出店数が増えれば略称が多くなり、逆に少ない場合は略称が少ないことを実証した。学校用語については、この20年間の変化とその原因を明らかにした。さらに、形容詞型活用をする色彩名詞は、この地域に由来からあった形容詞化の構造が残っていることが要因となっていること、また、オノマトペについては、鉛筆の先が尖っている様を表す語を取り上げ、周辺地域への広がりと言語の変容について明らかにした。

1. はじめに

東海地方とは、愛知県、岐阜県、三重県、静岡県が含まれる地域を指す名称である。ただし、テレビの放送圏が愛知県、岐阜県、三重県でひとまとまりとなることから、一般に「東海3県」という名称で括られ、その経済的結びつきも、名古屋市を中心に大きなまとまりとなっている。このことはすなわち、文化全般の特徴も、名古屋市のある愛知県尾張地方と他の地域とが、程度の差こそあれ結びついており、方言についても連続性を意識して考察することが必要であることを示している。

たとえば、同じ愛知県にある三河地方は、アクセントや形容詞の連用形の形が異なるなどの差異を有しながらも尾張地方と共通点を多く持つし、岐阜県美濃地方も、岐阜県が指定辞の「ヤ」を用い、愛知県が「ダ」を用いるなど、文法的に大きな違いはあるが、語彙的に愛知県尾張地方と多くの共通点が見られる。さらに、三重県北部は、アクセントや指定辞の「ヤ」など、愛知県尾張地方と一線を画す特徴も多いが、かつては自転車を表す愛知の新語「ケッタ (マシーン)」を北部地域で受け入れるなど、名古屋からの影響を受けやすい地域にある。この3県を調べることは、経済圏と言語との関係を知る上で好材料となる。

岐阜大学は、岐阜県美濃地方の中核である岐阜市にある大学である。岐阜駅と名古屋駅は、新快速電車でもわずか20分であり、愛知県尾張地方の学生も多く通う。これまでも、山田自身、岐阜大学の学生を中心に地図を描き報告してきた(山田2008, 2015など)が、三重県北部の学生や愛知県三河地方西部の学生は、名古屋駅での乗り換えがあったり距離的に離れていたりして、比較的少数であり、分布状況が掴みきれなかった。しかし、方言の広がり方を考えるとき、やはりこの2地域の情報は欠かせない。特に、経済的に結びついている名古屋を中心に広がりを見せる若者も使用する語句については、両地方の情報が重要である。このため、さまざまな若者方言の調査を行なう際に、岐阜大学で行なうだけでは十分ではないことがあった。

今回、愛知県名古屋市と豊橋市にある2大学にて調査を行ない、特に若者方言の広がり方を、名古屋市を中心としながらも三河地方や三重県北部を含めてより広範囲に調べることにした。その2大学とは名古屋市にある椋山女学園大学と2012年まで豊橋市に本部を置き現在でも豊橋市に文系2学部がある愛知大学である。椋山女学園大学は、1学年1200人を超える学生数を有する愛知県内有数の女子大学である。2022年4月から7

月にかけて、方言に関する講義を非常勤で1コマ担当する授業(約120名登録)で、毎回アンケート調査を行なった。また、愛知大学では2022年9月から12月にかけて、遠隔授業で三河地方の学生を中心に補助的な調査を行なった。これまでの岐阜県中心の調査結果に加えてこれらの地方の結果によって、東海3県の言語的つながりをより広範囲に考察できるようになった。

調査は、教育にも配慮し簡単なものを心がけた。方言の授業であるから地域的な広がり調査が必要であると最初の授業で断った上で、受講者各自の出身小学校を問い、まず地図上に配置した(おおよその地名は本考察末尾に地図とともに示す)。その上で、毎回の授業で方言に関する質問をし、回答を地図化してスライドに示したという簡単なものである。問いの趣旨を正確に理解していないで回答してきた者などもあったが、おおよその分布は描けたと実感している。ただし、授業において自分たちのことばの分布を翌週には地図化して返されることが学生の興味関心を惹く一方、あまり多くの質問を毎回投げかけることは学生と地図作製者である教員の負担が大きくなることを考慮し、原則、毎回3問までとした。

調査結果は、Microsoft Excelを用いて受講者番号で整理した。地図化には、小西いずみ氏が開発した言語地図作成支援スクリプト「txt2txt.js」を使用し、Adobe Illustrator CS2022に出力した。このスクリプトは、Adobe Illustrator上に置かれた数値を、Microsoft Excel上の隣のセルの記号で置換するもので、地図化作業の効率化に大いに役立った。

本考察では、特にアクセントと語彙に関して、アンケート結果とその地理的分析を述べる。

2. アクセント

NHK放送文化研究所編(2016)では、地名に関し地元で用いられるアクセントが採用された。たとえば、愛知県岡崎市の「オカザキ」は、全国ニュースで「カ」にアクセント核がある中高型アクセントで発音されるが、普段、平板型を用いる地元の反発も多く、2006年のNHK連続テレビ小説「純情キラリ」では途中で中高型から平板型にアクセントが変わった。また、2023年のNHK大河ドラマ「どうする家康」の予告編でも、主演の松本潤は、平板型アクセントを用いている。地元のアクセントを知っておくことは重要なのである。

一方、地元のアクセントと一口に言っても、揺れない地名と揺れのある地名がある。「岐阜」などは、平板型で共通語も地元も変わらないが、「名古屋」、「金山」、「安城」などは地元でも揺れがある。そこで、今回は、「ナゴヤ」と「カナヤマ」の2地点のアクセントを調査した。

2.1 「金山」のアクセント

名古屋市にある「金山」は、名古屋市第二の総合駅であり、JR、名鉄、地下鉄の路線が通っている。この「金山」のアクセントは、JRでは平板型、名鉄では第二音節にアクセント核のある中高型として発音されている。「どちらが正しいか」という質問も受けるが、アクセントには地域差もあれば年代差もある。NHK放送文化研究所編(2016)には、平板型のみが載るが、地元の感覚としてどちらか一方だけが正しいということではなきない。

すでに山田(2015)にて、大学生世代に対する調査で、愛知・岐阜両県では「カナヤマ」は、平板型アクセントが一般的である一方、岐阜県内や愛知県三河地域には第2音節が高い中高型が一定数見られることを指摘した。また、2015年度放送大学岐阜学習センター面接授業受講者で金山駅近隣で生まれ育った年配女性の証言として、中高型アクセントがかつて名古屋市内で優

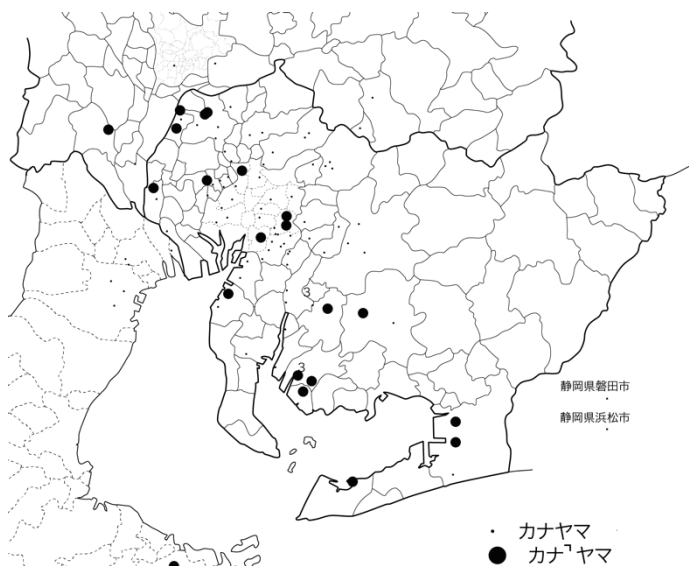


図1 「金山」のアクセント (2022.5.26)

勢であったとの証言も得られている。このことから、名古屋市市内においては、中高型から平板型への変化が生じその変化が周辺部に広がったものと結論づけた。いわば、名古屋市を中心とした周囲分布である。

今回得られた結果からは、図1に示したように、名古屋市周辺に中高型●が多いことは認められるが、それほどきれいな分布とはならなかった。人数としても、中高型アクセント使用者は、回答総数106人中23人と全体の2割程度ではあるが、名古屋市市内にも見られるという結果になった。このことは、単に古い中高型が新しい平板型によって周辺部に追いやられた結果では説明しきれないことを示している。

そこで、中高型と回答した学生の出身地をもう少し詳しく検討してみたところ、名古屋市内へは名鉄を利用して出やすい地点が多いことが推察された。特に尾張地方北部には名鉄の支線も多く、それらを利用する際に、名鉄のアナウンスで中高型アクセントに馴染んでいるとの仮説である。一方、岐阜大学へ通う学生は、大学へのバスの発着が多いJR岐阜駅を利用する人が多く名鉄を利用して名古屋から通学することは少ない(ただし、三河地方からは学生定期の安さもあって名鉄の利用者も少なくない)。本節冒頭でも述べたが、JRでは平板型、名鉄では中高型のアナウンスがなされている。通学経路と慣れ親しんだアクセントとの関係があるとの仮説である。

この仮説を検証するために、名古屋へ行く際に利用する電車(JRか名鉄か)とアクセントとの関係を、愛知大学と岐阜大学の授業にて問うた。結果として、愛知大学の学生は、中高型アクセントを用いる学生が、21人中8人と比較的高率で、その6人が「ふだん名鉄電車を利用する」と回答している。一方で、「ふだん名鉄電車を利用する」との回答者は14人で、「JRを利用する」の3人、「両方利用する」の4人であり、もともと名鉄電車利用者が多く、検定をかけるまでもなく明確な差があるとは言えなかった(2022.11.1調査)。一方、岐阜大学での小調査では、名鉄電車が路線網をもっている愛知県の出身者に限定して示すと右のようになり、弱い相関が見られた(2022.12.14, 15調査)。

	名鉄	JR
平板型	0	6
中高型	6	3

グラフ1 愛知県在住岐阜大学生の通学経路とアクセント型

結果として、利用する交通手段とアクセントとの関係について、一定の傾向は見られるが明確な差は得られないと結論づけられる。さらなる調査が必要である。

2.2 「名古屋」のアクセント

「名古屋」のアクセント型については、かつては低起式の「○○●」(○は低い音、●は高い音を示す)が一般的であったが、今の60代以下では頭高型の「●○○」が主流である。一方で、若い世代には「○●●」という平板型アクセントも入り込んできており、低起式(平板型)→起伏式頭高型→平板式平板型アクセントという変化があると実感している。

今回は、このアクセントの地理的分布と変化を確かめるため、どのアクセントで言うことが多いかを問う調査を行なった。ただし、低起式アクセントは外した。その理由は、後で述べる。

さて、椋山女学園大学での106名に対する調査結果は、図2の通りである。

平板式は、わずかに6地点出身の学生から回答があったものの、ほとんどは頭高型となった。「6地点」と述べたが地域的な偏りはつかめなかった。愛知大学での調査(2022.11.1)でも、愛知県蒲郡市と豊橋市出身の学生が平板型を使用すると回答しており、三河地方に平板型アクセントを用いる人がいないわけではない。

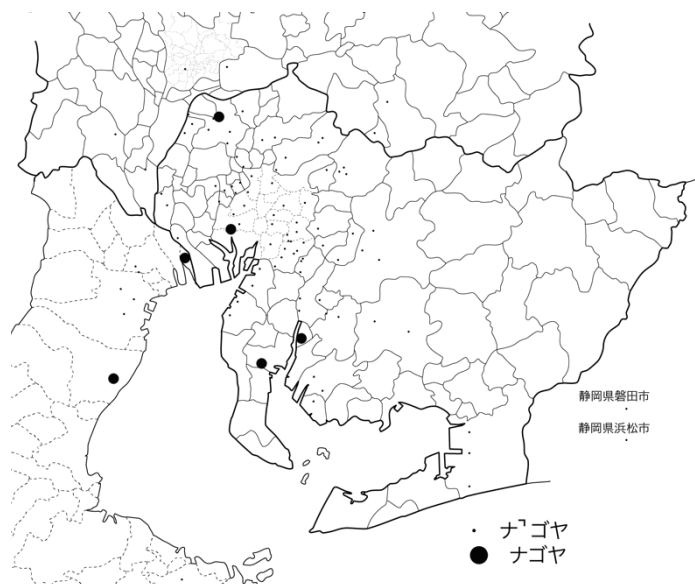


図2 「名古屋」のアクセント (2022. 5. 26)

このことは何を示しているのか。1つには、地理的な差はなく、むしろ流行に敏感な学生が平板型を用いているという仮説が考えられる。共通語で「彼氏」や「クラブ」が頭高型にはない「イケてる感じ」を平板型に含ませているという観察と同傾向の考え方である。しかし、実際には、「名古屋」を平板型で発音することにそのような印象を含ませる確証は、岐阜大学でのフォローアップインタビューでも得られなかった。実際、岐阜大学で調査をすると、「いちご」でも「ミスタードーナツ」の略称である「ミスド」でも、平板型に加えて頭高型アクセントが一定数確認できる(山田2015:4-5)。アクセントの正確な知覚の問題もあるだろうが、それ以上にアクセントに無頓着な人が一定程度、地域を問わず存在するという可能性も捨てきれない。

また、さきほど低起式を除外した理由は、正確な知覚が困難であることが理由に挙げられる。実際、「名古屋」を例に、低起式「○○●」と平板式「○●●」を発音してみると、区別が明確に分かるという回答は41人、曖昧であるという回答は16人であった(岐阜大学2022.12.14,15調査)。内輪東京式である美濃・尾張地方の話者にとって、下がり目(アクセント核)は語の弁別性に関わるが、上がり目は弁別的でなく区別が難しい。そのため、続けて発音するだけでどちらが自然な発音かを尋ねても、正確な違いが得られるとは言えないのである。このことと頭高型・平板型の揺れとは直接は関係ないかもしれないが、アクセントの知覚能力の問題は、あらためて問うべき課題と言えよう。

3. コンビニエンスストアの略称

大学生世代で用いる地域的偏りのあることばとして、商品や企業名の略称を挙げるができる。特にコンビニエンスストア(以下、コンビニ)の略称は、ファミリーマートを「ファミマ」と企業自らが名乗っている¹などの場合にはバリエーションの存在する可能性は低いが、「セブンイレブン」や「ミニストップ」などは、若者世代が独自に略称を作り用いているところにバリエーションの生じる余地がある。かつて東海地方にあったユニー系列のコンビニ「サークルK」は、「サーケー」という略称もあったが、「マルケー」と略されることも多かった。名称のどこにも「マル」という音は含まれていなかったがロゴマークから若者にはこう呼ばれていた「略称」である。親しみがあつた証左でもある。

今回は、東海地方に2002年以降、新たに参入した「セブンイレブン」と、バリエーションが多そうな「ミニストップ」の略称について問うた。

3.1 「セブンイレブン」の略称

セブンイレブンが東海地方に本格的に進出したのは、2002年である。同年12月4日、愛知県名古屋市内に開業した5店舗に先駆けて、三河地区には11店舗開業していたが、2002年以降、愛知県内をはじめ岐阜県内へも広がりはじめた(セブン-イレブン・ジャパン「お知らせ」(2002年12月3日公表、https://www.sej.co.jp/mngdbps/_material_/localhost/pdf/2002/120301.pdf =2022.12.28確認)より)。

比較的最近の進出であることは、その分、略称が使われないことを意味する。事実、2015年の調査では、略称不使用とした回答が岐阜市内など岐阜県内、および犬山市など尾張北部には固まって見られた。しか

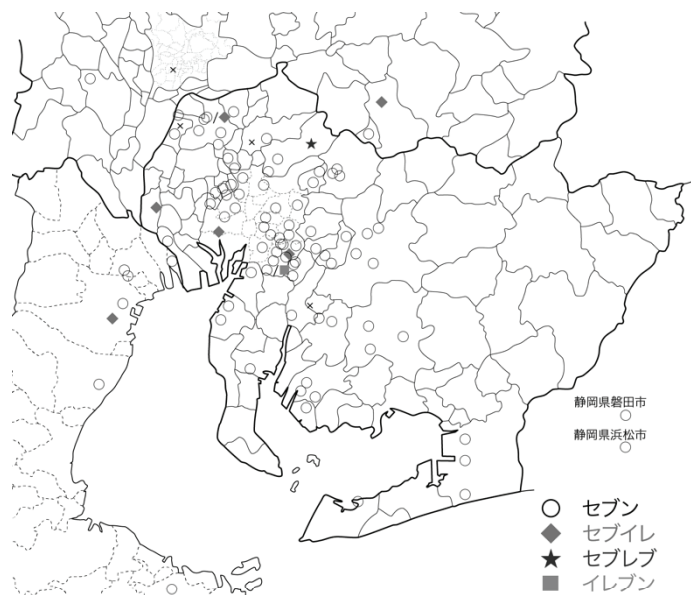


図3 「セブンイレブン」の略称 (2022.7.14)

¹ ファミリーマートホームページでは、「ファミマで栗集めちゃいました」や「ファミマのアプリ」など、公式に「ファミマ」ということばが用いられている(2022.11.1確認)。

し、今回の調査では大半の地点で何らかの略称を用いているという結果が得られた。厳密には、岐阜県内の回答が今回の調査ではほとんどないため正確な比較はできないが、店舗が身近に増えてきたことにより略称も次第に使用される地域が広がったものと考えられよう。

使用される略称については、大半が「セブン」と回答しており、この状況はほぼ変化ない。2015年調査で一宮市付近に固まって見られた「セブイレ」はあいかわらず尾張地方及びその周辺に散見されるが、前回、愛知県での結果がまとまった地域として得られなかったため、明確な分布の変化については述べられない。

3.2 「ミニストップ」の略称

「ミニストップ」の略称については、「セブンイレブン」の略称よりもバリエーションが多い。2015年調査でも、愛知県三河地方に「ミップ」、尾張地方から美濃地方南部に「ミニプ」、岐阜県内に広く「ミニップ」などが固まって見られたほか、尾張北部から岐阜市にかけての若干地点で「ミニスト」が観察された(山田2015:84)。

それが、今回、「略さない×」という回答が大幅に増えたことは注目に値する。実に、101人中68人が省略しないというというのはどういう理由からであろうか。

株式会社アール・アイ・シー刊『月刊コンビニ』を出典とする「都道府県データランキング コンビニエンスストア」(<https://uub.jp/pdr/m/c.html> = 2022.11.

29確認)によると、全国第4位のコンビニ店舗数を要する愛知県において、企業ごとに見ると、ファミリーマートが1589店、セブンイレブンは1068店、ローソンが716店、ミニストップが196店となっている(2022年3月)。特に、ミニストップは、2022年に愛知県内で4店舗、2020年には愛知県内で15店舗、岐阜県内で9店舗減らしている。大手コンビニ4社の中でミニストップは、圧倒的に店舗数が少ないため「見ない」地域が広く、さらには、閉店により馴染みがない地域が広がっている。このことが、「略さない」という回答の広がっている理由であると考えられる。

一方で、三河地方の「ミップ」、尾張地方の「ミニスト」という対立は、より明確に今回の地図に現れている。図4では、岐阜県内出身者が少なかったため、岐阜県内での「ミニップ」の伸張退縮は確認できなかったが、岐阜大学での追加調査にて、岐阜市及びその周辺に「ミニップ」が7件確認された。ただ、「ミニプ」も美濃地方広く広がっており、今後の勢力争いを観察していくことが若者方言の変化の要因を明らかにしていく上で重要であると考えられる。今後とも調査を続けていく。

4. 愛知県の「放課」

「愛知県義校規則」(1873)に始まるとされる「放課」は、全国で「休み時間」と呼ばれる学校での時間割の一部である。このような学校に関わる方言は、同一県内で高等学校卒業までを過ごす大半の県民には、方言として意識されることなく当たり前のことばとして浸透していることが多い。

1時間目と2時間目の間の短い休み時間は、次ページの図5に示すように、愛知県内で単なる「放課」、あるいは「5分放課」などと呼ばれる。この状況は、ほとんど変わっていないようにも見えるが、愛知県内で「放課」以外の「休み時間」なども見られるようになってきていることは注目に値する。山田(2008: 40, 42)では、(もちろん、調査が全愛知県民、全校区(学区)に対して行なわれたものでないことは承知の上であるが) 短い休み時間に対する「放課」以外の回答は、愛知県内に皆無であった。

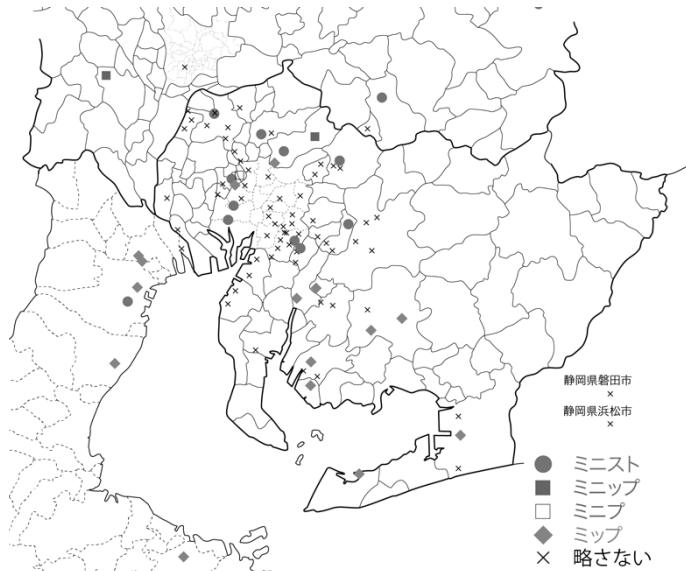


図4 「ミニストップ」の略称 (2022. 7. 14)

一方、2時間目と3時間目の間の長い休み時間は、尾張地方で「大放課」あるいは「20分放課」、三河地方で「長放課」または「長い放課」が多いが、豊橋では「20分放課」と呼ばれている。こちらについて、今回は調査していないが、基本的に状況は、何年経っても変わらないと推察される。

以下、昼休みと放課後の言い方について考察をする。

4.1 昼休み

愛知県内で、給食後の自由な時間は、「昼放課」と呼ばれることが多い。岐阜県や三重県では「昼休み」であり、「放課」系の独特な用語である。

しかし、見逃せないのは、山田(2008)では、同じ休み時間と言うことで「放課」を用いた「昼放課」がほとんどであったが、今回は図6に示のように、共通語と同じ「昼休み▼」という回答が一定数見られるようになったことである。

「昼休み▼」の地域的な偏りとしては、やや名古屋市とその周辺にまとまりが確認できるほか、三河地方にも点在する。特に特徴ある偏在を指摘できるほどではない。

数的にまだ「昼休み」が愛知県で少数派であることに変わりはない。今後、「昼放課」とのせめぎ合いを注視していかなければならない。

4.2 放課後

休み時間を「放課」と呼ぶと、共通語で言われる放課後は、理屈で言えば授業時間を指すことになってしまう。そのため、愛知県内では放課後を意味することばは、特定の語に決まっておらず、「業後」や「授業後」、「学校が終わった後」あるいは「学校の後」のような迂言形、さらには「帰りの時間」など、多様に表現されてきた。

一方、一昔前には一般的なことばではなかった「放課後」ということばが、上に挙げた多様な語形に加えて、今回の調査においては、尾張地方を中心に割合・分布域ともに伸ばしてきている状況が描かれた(図7)。共通語の「放課後」に一本化されようとしている局面と捉えられる。

このことは、共通語からの影響だけで説明されるものではない。なぜなら、単なる「放課」は依然として使われ続けているためである。むしろ、「業後」から「帰り

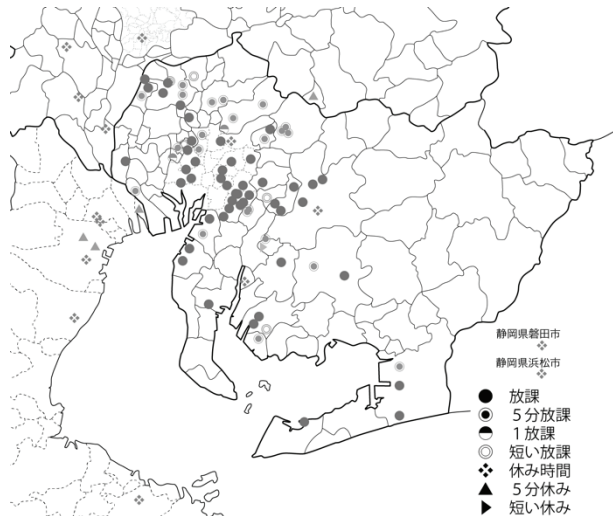


図5 「休み時間」の呼び方 (2022. 6. 23)

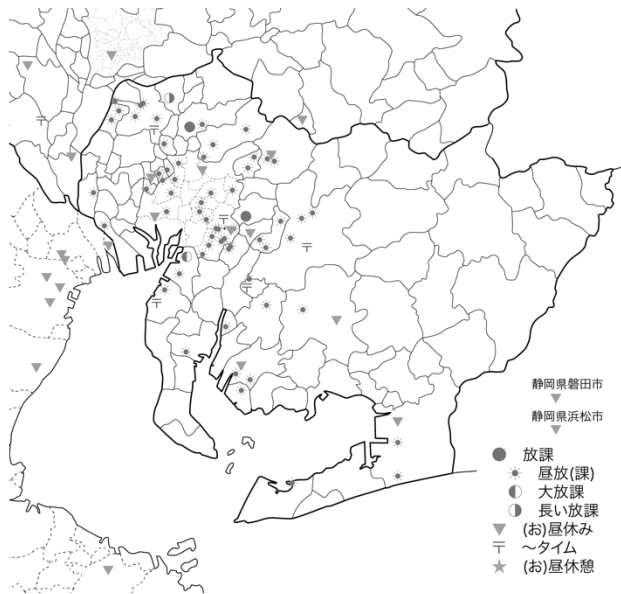


図6 「昼休み」の呼び方 (2022. 6. 23)

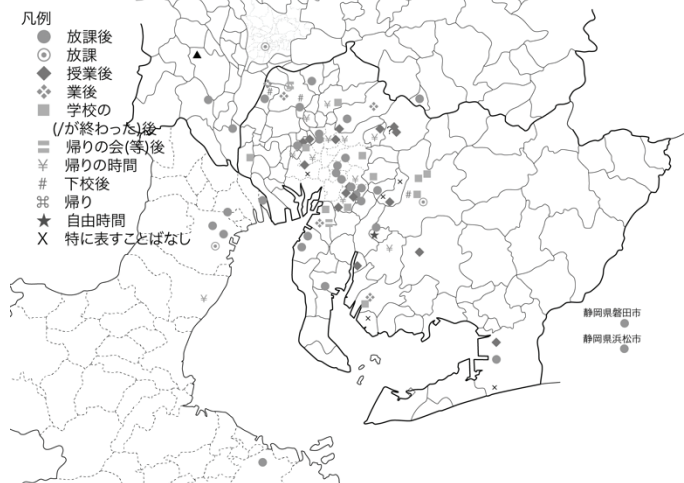


図7 「放課後」の呼び方 (2022. 6. 23)

の時間」まで多用に存在する語形の、コミュニケーション上あるいは学校行政上の不便さが、統一した語形を求めたことも一因であろう。この点が、4.1節の「昼放課」対「昼休み」と違う点である。

さらに、通学区を越えた利便性も、この時間帯を指す用語には求められる。一般に小学校は、学校によって異なることばを使っているとしても差し障りない。係の名前など、学校ごとに多様なことばが用いられていることも証拠として挙げられよう。ある学校に転任してきた先生は、郷に入れば郷に従えの格言のとおり、その学校で使用される名称に合わせていくものである。しかし、共働きの増えてニーズの高まっている「放課後」の児童クラブなどは、通学区を越えて利用されることもある。統一された名称がないことの不便さを最初に感じる時間帯なのである。

この「放課後」の名称が、他県に隣接する地域から広まっているわけではないことにも留意したい。むしろ、名古屋市内に「放課後」が多く見られている。今後、名古屋市から名称の統一が実現していくのか、こちらにも注視したい。

以上、休み時間の名称の分布とその変化を考察してきた。基本的に「放課」という名称を残しながらも、共通語と同じ「昼休み」や「放課後」が増えつつある現状が確認できた。

5. 体育座り

学校で用いられることばには、バリエーションがあっても地域的偏在が見られない語もある。今回は、紙幅の都合から1語、「体育座り」を取り上げる。

飯間浩明(2015)の調査²など、すでにいくつかの調査結果があるように、「体育座り」は全国に見られ、九州、近畿、東北を除いて「体操座り」が見られる。また、近畿地方では「体育座り」と「三角座り」が併用されている。周囲分布から考えれば、「体育座り」>「体操座り」>「三角座り」の順で近畿地方から広がったことになる。「三角座り」は、たしかに近畿地方から近年広がったものである可能性を否定できないが、「体育座り」は他の2語形の分布範囲とも重なる形で全国に分布する。周囲分布では、これほど広範囲に併用地域を生じることは考えにくい。

では、この地域での詳細はどうなっているのだろうか。図8を見てみると、同じ市内であっても「体育座り◆」と「体操座り■」の両方が現れており、両語形を併用している回答も少なくない。このことから、東海地方では地理的分布に等語線が明確に認められない様相であると言える。

複数語形が併用されている場合、ひとつには、生涯における変化が考えられる。人は一生同じ語を用い続けるわけではない。方言語形についても同じく変化は生じる。図8に見られる「お山座り●・お山さん座り◎」は、「さん」が入っていることから分かるように幼児期に用いられる語形である。幼稚園では「お山座り」と言っていたが小学校では「体育座り◆」に変わったと（小学校で使用した語形を答えてほしいと断ってあったにもかかわらず）との回答もあった。同時期に複数語形を用いているのではない可能性もある。事実、「学年によって呼び方が変わった」との回答もあった。

しかし一方で、「体育座り◆」と「体操座り■」のどちらが低学年でどちらがより高学年で用いられるかという傾向は現れなかった。東海地方での複数語形併用状況は、一人一人の人生においては時期によって変

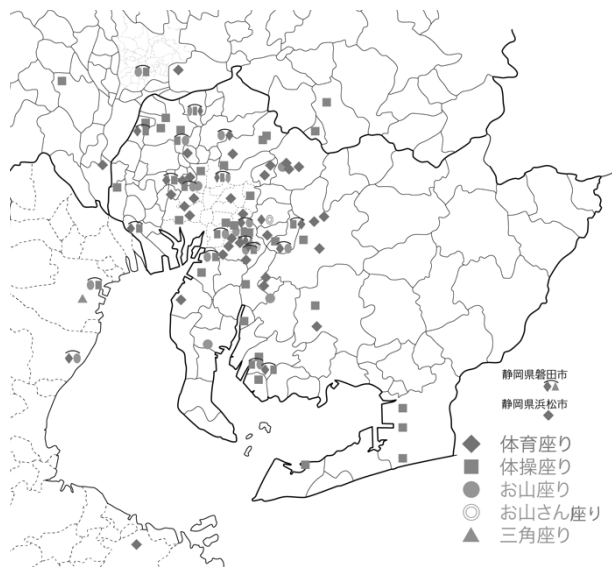


図8 体育座りの言い方 (2022.6.23)

² 「ねとらぼ」 <https://nlab.itmedia.co.jp/nl/articles/1505/07/news125.html> より (2022.12.2確認)

化があったものの、地域としては混在している状況と言わざるを得ない。

ひとつだけ明確に地域差の反映であろうと考えられるのが、三重県四日市市の「三角座り▲」である。三重県もやはり近畿地方なのだということを表しているであろうが、わずかに1例。「体育座り◆」と「体操座り■」も三重県内に観察され、三つ巴になっている。三重県については、詳細な調査が必要であろう。ちなみに岐阜県については、岐阜大学での追加調査で、多数の「体操座り」の中に「体育座り」が一部、地域的な偏りも明確でないまま混在している、すなわち愛知県と似た状況であることがわかっている。

6. 形容詞型活用をする色彩名詞

東海地方の文法装置としての方言に、形容動詞語幹の形容詞化がある。「横着」や「丈夫」は、共通語では「な」という活用語尾を介して次の名詞に係っていくが、当地では「横着い」や「丈夫い」となり、さらには、「がさつい」や「黄くない」なども見られる。「黄くない」については、「黄色い」に変化する前の形容動詞「黄くなり」の語尾の一部を残して「い」が付いたものである。一般的に閉じた類として増えにくい「い」で終わる形容詞が生産的に作られやすいというのが、当地の形態論的特徴である。もちろん、なんでもかんでも「い」が付くわけではない。「元気い」や「きれいい」などは、「きれいく」などという語を外来のものとして聞かなくはないが)用いられないし、外来語の「ゴージャスイ」や「デラックスい」などもない。また、形容詞のすべての活用形を備えているわけではなく、もっぱら終止・連体形の「～い」の形と連用形の「～く」、それに条件を表す「～けりゃ」くらいが用いられるに留まる。文法的特徴はもっているものの、あくまでも語彙的な現象なのである。

しかし、当地で広がりつつあるのは色彩語彙については、より一層、類推が進む傾向にある。これまで調査した中で聞かれたのは、和語の「むらさきい」や「みどりい」「きみどりい」などであるが、特に「みどりい」と「ピンクい」はもっとも広く用いられている。今回は、この中で「みどりい」と「ピンクい」について、分布を調査した。

6.1 「みどりい」

「みどりい」については、愛知県内で広く用いられていることが確認できる。愛知県内では、ほぼ9割の回答が「使用する●」であった。これは、岐阜県や三重県、静岡県など、隣接する県の出身者より多いことが見て取れる。補助的に調査した岐阜大学での岐阜県内出身者の「みどりい」使用率は38.1%であったことと比較すると、やはり愛知県内の出身者の使用率が際立って高いことが指摘できよう。

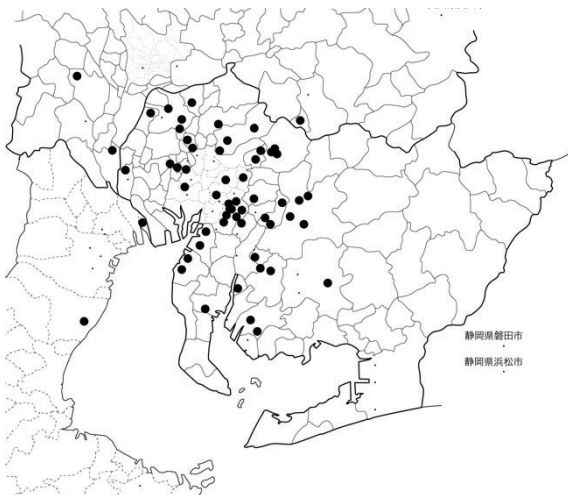


図9 「みどりい」 (2022. 5. 19)

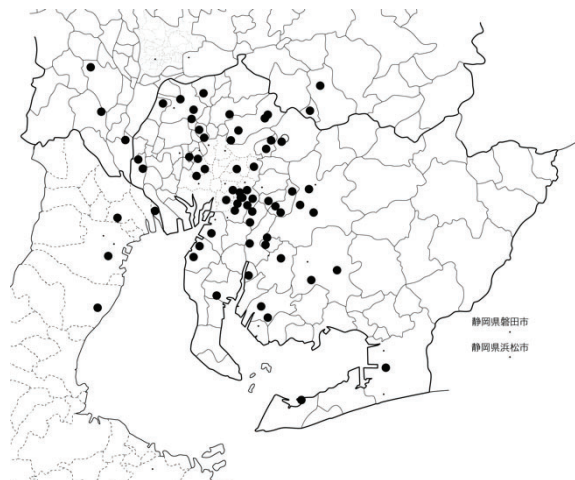


図10 「ピンクい」 (2022. 5. 19)

6.2 「ピンクい」

一方の「ピンクい」については、岐阜県や三重県での使用も一定程度確認できる。実際、「ピンクい」は、岐阜県内で、昭和40年生まれの前も使用してきたほどなじみのある語であるが、現代でもほぼ同様に用いられていることが確認できた。

「みどりい」と「ピンクい」を比較してみると、両者を併用する割合が54.1%で、どちらか一方しか用いない21.4%を大きく上回った。ほかに「オレンジい」などを回答してきた学生もいた。すべての色彩語彙に「～い」の形が用いられているわけではないが、色彩名詞の形容詞化は、単に語彙的というよりはシステムとして当地方言に存在すると言ってよい面もある反面、すべての色彩語彙に広がっているわけではない。ただ、「みどりい」を使う学生は、多く「きみどりい」も用いるという生産性を一部有しているようではあった反面、「ふかみどりい」は用いないとの回答も多数あった。この点は、さらに調べる必要がある。

7. オノマトペ

第5節でも述べたように、話者はその人生において複数の語形を用いる。それは、年齢による変化もあれば、場面による使い分けなどもある。ここで紹介するオノマトペの語形は、当然、上記のような変化や使い分けもあるであろうが、さらには強調具合、言い換えれば程度に応じた使い分けも考えられる。

今回は、「鉛筆の先が尖っている状態」をなんと形容するかという問い方をした。複数語形を挙げてきたものもあれば、1語形のみを挙げてきたものもある。それを素直に記号として表したのが図11である。

図11を見ると、愛知県内では、かなり広く「トキントキン■」が見られる。複数語形を挙げてはいけないという指示は出していないが、多くは1語形のみを挙げてきた。尾張東部から三河西部にかけて、やや「トキトキ■」が多いように見られるが、明確な偏りは見られない。そのほかに、「トッキントッキン◆」も名古屋市内及び近隣に多く見られるが、明確にこの地域に限定できるものではない。

「研ぐ」を語源とする「トキトキ」の強調された形が「トキントキン」、さらに強調された形が「トッキントッキン」という1つの系列の中に位置づけられるとすれば、「トキトキ■」がもっとも古く、そこから強調される形として「トキントキン■」が派生し、さらに「トキントキン」の強調形としての意識が薄れて、「トッキントッキン◆」が生じたものと考えられる。一応、そのストーリーに合った分布と言えよう。

さて、トキントキン系以外については、もっとも古くこの地域で調査した2008年には、愛知県内で「ツンツン」とトキントキン系が併存状態にあった。この「ツンツン」は、関東地方から九州地方まで広く分布が確認される、一昔前の「共通語」であった。そこに関西中心に「ピンピン」、そして名古屋を中心にトキントキン系が伸張することにより分布域に大きな変化がもたらされたと考えられる。図11では、関西中心の「ピンピン▲」が三重県内と岐阜県西部、および名古屋市内に確認される。一方、かつてこの地域でも標準であった「ツンツン●」が、名古屋から見て周辺部にわずかに確認されるが、その数は減っている。

さて、トキントキン系についてはどうか。「トキトキ■」は、2007年、2015年の調査と比べて割合としても減っていることに加え、上で述べたように、すでに強調される前の「原形」という意識も廃れているようである。すでに、普通の形は「トキントキン」なのである。この「トキントキン■」は、2008年、2013年の調査でも岐阜県内に入り込んでいることを確認することはできるが、図11では、意外と岐阜県内で使用域を広げていない。今回は岐阜県内での回答地点数が少なくはっきりしたことは言えず、この理由は明白ではないが、岐阜県内には、何らかの広がりを抑える心理的要因があるのではないかと推察される。

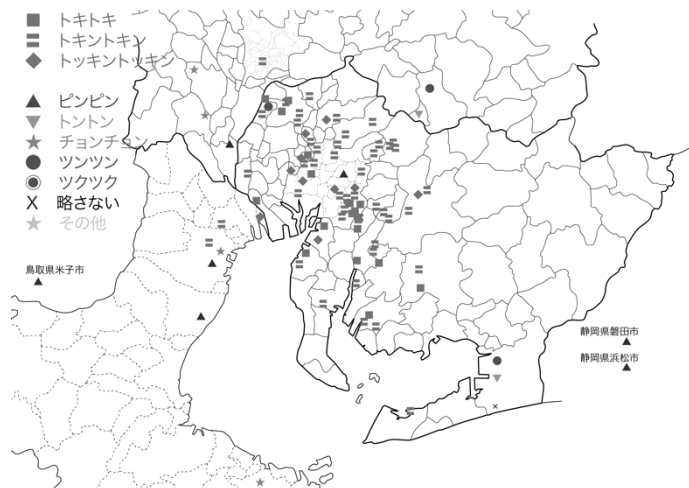


図11 鉛筆の先が尖っているさま (2022. 7. 7)

8. おわりに

アクセントに関して、山田(2015)と明確な差が見られた項目は、今回なかった。このことは、アクセントは変化しやすい性質が認められるとは言え、10年単位の調査では経年変化に如実に表れるほど変化が顕著ではなくより緩やかに変化することが示せたと言えよう。また、アクセントと通学経路など生活環境との関連性については、一定の傾向は見られるが、もう少し調査が必要であることも確認できた。

語彙に関しては、一定の変化が確認できた。コンビニの略称は、身近に存在するか否かが大きく関連しており、店舗展開の変化が略称の使用に関係していることも確認できた一方で、学校用語も、愛知県特有の「昼放課」の衰退と「放課後」の伸張が確認できた。学校でも共通語化が進んでいるということである。反面、明確な分布が認めがたい「体育座り」のような語形がある一方、色彩名詞の形容詞型活用や独自のオノマトペなど、東西の接点である東海地方独自の分布も確認できた。

東海地方の方言語彙は、変化しながら独自性を保持している点で、若い世代の変化を今後も追う必要があることが確認できた。

参考文献

NHK放送文化研究所編(2016)『NHK日本語発音アクセント新辞典』
 山田敏弘(2008)『ぎふ・ことばの研究ノート第7集 岐阜と愛知の方言地図集』私家版
 山田敏弘(2015)『ぎふ・ことばの研究ノート第16集 岐阜と愛知の方言地図集II』私家版



図12 本考察で言及した県市町名及び地域名

(令和5年1月5日受理)